

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 村上春樹 『ノルウェイの森』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 65 回のツイキャス読書会の課題図書は、村上春樹 『ノルウェイの森』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

レイコについて、彼女の行動が「気持ちが悪い」というのはよくわかると思います。

ワタナベと会うのに直子のシャツを着てくるなど、違和感があります。

しかし、私が一番はじめにノルウェイの森を読んで強烈に印象に残ったのは、レイコ本体よりむしろ、彼女のトラウマの原因となった、ピアノを教わりに来た少女のほうでした。

この少女によく似た人に私自身これまでの人生で何度か遭遇したことがあり、その人たちは私にとってもトラウマと言えるのではないかとはいくらい、強烈な印象(と悪影響)を残しました。

そういう人に短いスパンで定期的に会わなくてはいけなかったときのことを思い出すと、今でもストレスを感じます(レイコの言葉にあるように、「そのことを考えると今でも寒気がする」という感じです)。

その人の嘘や情報操作、印象操作によって、私自身も周りの人間関係もひっかき回され、そこそこ仲良くやっていた(と私が感じていた)人たちとの関係にもヒビが入ったりしました。

そういう人はレイコが話しているように、容姿がとても魅力的だったり、高い才能やセンスのようなものを感じさせたり、何か人を強く惹きつける天賦の才のようなものがあつたりするので、周囲もその人の話の方を容易に信じます。そして、本当のことや客観的事実と嘘の話をうまくつなぎ合わせて、こちらに関する悪い印象を作り出して、(相手やタイミングすらうまく選んで、なおかつ自分自身の印象を汚さないように)周囲の人に広めたりするので、こちらもだんだん何が本当で何が嘘なのか混乱してきてしまうのです。

これがまさに、レイコの言うように、「まるで何かの罠か落とし穴みたい」という感じです。

レイコが話していたこの少女についての話や、レイコ自身が感じたことについて語っている話は、私にとってはとてもリアルに感じられました。

そんな記憶が思い起こされ、ノルウェーの森のこのくだりを読んだときには、「わかるよレイコさん」と思ったりしたものです。

もちろん、そういう「トラウマ」が過去にあるからと言って、その後の他人に対する気持ち悪い振るまいが

許されるということにはならないでしょう。誰かをお世話するふりしてその人に精神的に依存したり、支配したり、自尊心を搾取したり、マウンティングしたりしないように私自身も重々気をつけなくてはと思います……

「ピアノを習いに来た少女」に関するレイコの言葉が虚言ではなかったとして、宮澤さんはこの少女のような人のことをどうお考えですか？

私自身が本を読む理由はいろいろあるのですが、そのひとつには、このような人に心を操られて振り回されるのはもう嫌だ、なぜこういふことが起こるのかを理解したいという気持ちがあるのだと思います。

(おわり)

『レイコさんの的な人』

私は、今回初めて読みました。といってもまだ全部読めていないのですが、噂で聞くところのこれが強烈キャラのレイコさんなんだ！ と思いながら読みました。

信州読書会の宮澤さんの解説音声を聞かせていただいていたので、レイコという自己欺瞞の塊のような女の人がいるという事は知っていたので、読みながら確かに凄い、強烈すぎて怖いと思いました。

それと、事前に聞かせていただいていたので、レイコさんと、直子の世界と、ミドリと永沢さんの世界とがはっきり別れているのが読んでいて実感できました。

レイコさんは本当の事を言ってるのかもしれないし、レイコさんからだけの情報なので本当の所は分かりませんが、現実にこんなことある？！って思うような内容ばかりで信じて良いのか分かりませんでした。

でも、話の真意が疑わしいというのは、わりとある事のように思います。

実際に、それ本当？！ という話をよくする人が身近にいて、レイコさんみたいに親切で、お話が上手だから読みながらその人の事を思いました。

真実の話かもしれませんが、私は、実際に自分で聞いたりした以外は深く信用しない事にしてるので(話半分と思っている)、そうじゃなかったら全部が本当だと信じてしまうのかもしれないなと思いました。

しっかりと自分の考えを持つ事が大切だし、そうしていればレイコさんの的な人が現れても大丈夫なんじゃないかな？ と思いました。

(おわり)

『ノルウェイの森』を読んで

捧ぐ神がない、宗教が見つからない、社会や家庭に強いリーダーシップを見いだせない私は、生身の人間の有限を感じて生きている。古典作品や哲学に、何か拠り所を見つけないような、つかみどころない喪失感を埋めるものを探している。

それは私の「弱さ」なんだろうと最近思う。そんな感覚が、この幻想的でありながらリアルな作品とどこかで共鳴している。同じ体験をしたとか、登場人物の心情を理解したということではない。彼らは彼らであり、私とは違う。けれど涙なくしては今回も、読めなかった。

村上氏が訳された『グレート・ギャツビー』も頭から離れなかった。なぜだか、その二作は私に「赦し」を感じさせる。人生の中での生身の人間の欠陥から来る弱さを、言葉には出来ない何かを、態度を、保留して待ってくれている視点を感じる。ずいぶんバカバカしい生き方してるね、あんなこと無駄だったね、むしろ相手を傷つけただけだね、と自分を軽蔑したり、責めるのは辛い。都合が良すぎるかもしれないが、そんな自分に、

この作品は、いやいや、仕方ないよ、まあまああ…。ワタナベ君の直子の待ち方が優しい。ギャツビーの哀れな死に方がまさに哀れだ。そこに「解った」と理解しない待ち方、寄り添い方を感じるのだ。感じたいのだ。作品は言う。弱さだって悪くはない。儚くて何が悪い。浅はかだよ、確かに。でも、直子はあれでも彼を生へと突き放し、一人で逝けたじゃないか…。作品は再び言う。道を別かつことは終わることではない。

この世では姿が見えなくなるけど、どこかで、或いはあの世で生きている。置いてきたものも、喪ったものも、君の何処かにくっついている。それで意味や姿を変えながら君を引っ張っていくんだ、と。私を慰めるのだ。

直子の「私を覚えていて欲しい」とはそういう意味かと思っている。

(おわり)

『ノルウェイの森』 感想文

ノルウェイの森を読むのは、今回で3回目だったんですが、細かいところを忘れていたので楽しめました。

例えば、直子が胸の手術で入院していてバイクでキズキとお見舞いに行く場面。

このエピソードは、短篇「めくらやなぎと眠る女」で回想シーンで書かれているけど、そのまま、キズキ、僕直子の3人として読んでも間違いじゃなさそうです。

あとは、ワタナベが20歳から十二、十三年後、画家にインタビューしていたことです。

さてさて、問題のレイコさんに関してですが、レイコさんは、ワタナベ君に手紙を催促したり、直子がいるにも関わらず冗談で好意をアピールするところがあつくせ者だと感じました。

計画した通り、ワタナベ君とも肉体関係持ってしまうし、他人を上手く操る能力に長けているのでサイコパスですよ。

以前、宮澤さんが死んだ人の服を平気で来て現れる人をどう思うか？と読書会で話されているのを聞いて確かに、レイコさんはまともな人ではないなと思いました。(ワタナベ君や直子が可哀想。)

だいたい、阿美寮のシステムが音楽の先生とは言え、頭がボンッ！と3回弾けてしまった人と、病んだ直子が一緒に住んでるのが治療的にも最悪な環境ですよ。

ノルウェイの森という作品は、他の作品に比べて分かりやすい絶対的な悪役がないから、病んでいる人はいるものの、そんなに悪い人はいないイメージがあって、面倒見の良さそうなレイコさんの存在をどう見るかによって、作品の印象がガラリと替わると感じました。

救いがありすぎる作品ではないのですが、緑が短いスカートジーンズを穿いてワタナベ君と映画館に行ったり、バーに行っても変態的な会話がとて面白かったので、それがあっただけでも良かったです。

個人的には、37歳のワタナベ君が回想して始まり、物語の結末が37歳まで帰って来れず、迷い込んだまま終わるのが、この作品のいいところだと思っています。

ノルウェイの森は、村上春樹さんの自伝的な要素がある作品らしく、亡くなった方に捧げられているのは、村上春樹の初期三部作でも自殺した彼女がいましたし、キズキ君なんてほとんど鼠だし、初期の三部作をリアリズムに書き直したのがノルウェイの森なのかな～と読めば読むほど感じます。

キズキ君がなぜ死んだのかは読書会で盛り上がりそうですね。

医者の子として生きるのが嫌だったのかな？ と思いますが。。。

作中に登場する本は名作(グレート・ギャツビー、魔の山、八月の光、車輪の下、ライ麦畑)が多いし、ジャズの名盤(マイルス・デイビス、ビル・エヴァンス)が紹介されているのでノルウェイの森をさらに深掘りするのもなかなか楽しいのでオススメです。

(おわり)

「ちょっと春樹ファンになりました」

村上氏との本の出会いは読書会での「騎士団長殺し」です。しかし、その後読む気になりませんでした。推理仕立ての内容には面白さを感じましたが、超自然的な記述が納得出来ないし、性行為の記述の多さにも困惑したからです。今回も期待せずに読み始めました。

ところが、1章目から直子の心の傷の深さを知り、思わず泣いてしまいました。

この物語には心に傷を負った人や自殺を選んだ人がたくさん出てきます。直子の倫理観がもっと低かったら、キズキのプライドが低かったら、ハツミの愛を長沢が理解できたら、直子の姉が本音を吐き出せる人だったら、そしてこれらの人にそれぞれ本心を受け入れてくれる人が幼い時から身近にいたら、自殺は起きなかったと思います。

また、私の考えでは玲子もこの後自殺したように思います。彼女はピアニストへの挫折と家庭環境から生きる希望を無くしましたが、施設で患者に感謝されることで生き甲斐を回復させ生き延びて来ました。けれど直子が自殺したことでまた自信を無くし、直子の死によるワタナベの死を心配して、人生の教訓を説いたり、直子になって慰めたりしました。それが却ってワタナベを死の世界に導くことと考えると。。。。

残りの二人のうち、緑は愛することと拒絶することができる人だからこの世でも生きていけるでしょう。長沢は今は愛を知らないから挫折するまでは悩まず意志を貫き生きていくでしょう。

ワタナベは分かりません。緑に今後、救ってもらえるか？直子の自殺への責任から再び死者の世界にいかうとするか？私には最後の場面が謎です。私は心情を深く描く話に最後まで引き込まれました。

心の葛藤や社会の矛盾をテーマにした小説は、今はありふれていますが、30年ほど前に村上氏が、傷つき生き方に迷っている若者を対象に「人間の良心や心の葛藤」「生きるには愛が必要」をテーマとして小説を書いたことは驚きです。

早くからの洋楽や外国文学への関心、彼の伝えたいという意志の強さ、さらに翻訳の仕事で得た外国作品の知識が村上氏の執筆を刺激したのだと思います。

また、私は、状況の記述にも感心しました。詳細に書かれていて映像が浮かび上がりました。村上氏が脚本家を志望していた影響だと思いました。

(おわり)

死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。

この言葉から、わたしは生の中に本来的に含まれている死をいつも見過ごしながら生きているのだと知った。同時に、普段、死のことばかりを考えていては、日常が息苦しくて背筋のばして生きていけないもの、とも思った。ただこうやって「ノルウェイの森」を読みながら、かつてわたしのそばにいて可愛がってくれた人について、あらためて感謝を感じながら心から手を合わせるの悪くないなと思った。きっとこの小説は、個人個人の「死」への体験がどのようなものであるかによって、感じ方も、とらえ方も違うのだから。

直子は、10代でそばにいた大切な存在を二人自殺で失っている。その前に叔父も。生をまっとうできなかった者の無言のメッセージは残された人をいつまでも深く傷つけるだろう。

草原で直子はワタナベくんに、井戸の話をしている。キズキくん、直子、ハツミさん。みんなどこか自分の中にぽっかりと穴があって埋められない人たち。強烈に人を求めたり愛したりできなくて、孤独で、自分自身の生の可能性を信じられない人たち。そんな人が井戸に吸い込まれてしまう。レイコさんが旭川に行ったあとどうなったかは書いてないけれど、生きながらに終わってしまった人間だと自分でも言っているの、すでに井戸の中なのだろう。

「僕の体の中に記憶の辺土(リンボ)とでも呼ぶべき暗い場所があって、大事な記憶は全部そこにつもってやわらかい泥と化してしまっているのではあるまいか」(上巻 21p)

人はいろいろなことを記憶し、そして時間とともに忘れてゆく。浄化されないいくつかの靈魂が主人公の青春時代を覆い、その辺土につもらせて眠らせ、形なきものにそっとしておくしかなかったのだと思う。死者を共有しながら生きていくのは、信仰があればいいが、いつまでも哀しみや後悔のうちにとどまっていたら新しい世界は開けない。生と死の境目をさまようワタナベくんを、緑の存在がとどめた。ずっと魂の乾きを感じていた彼は、そのあと死の記憶を眠らせて、37歳になるまでやわらかい泥につもらせるしか生きつづける方法がなかったのだと思う。

人はこうやって自分にとって都合のよいように苦しい記憶を眠らせ、少しずつ忘れさせてゆけるから、あらたな出会いや刺激と経験が人を成長させつづける。

「ノルウェイの森」は世界一自殺者の多い国を代表する作家が、生と死について誠実に向き合い、自分自身と対話し、簡単に解決できない問題をやさしい表現で表したむずかしい小説だと、わたしは思う。残念ながらこの国にその答えはまだない。

(おわり)

「私達はどこにいるのか」

「実際私達が死ぬということは、死んでいく当人よりも、むしろ後に残る人々の問題なのである」

これは小説「魔の山」にでてくる言葉だ。私には難しすぎてかなり飛ばし読みだったが、父が亡くなってほどなくして読んだ小説だったのでこの言葉がなぜか心に刻まれていた。そして今回ノルウェーの森を読んでまたその言葉を思い出した。

直子もワタナベ君も浮遊霊みたいで現実を生きていない感じがした。東京から離れた山奥にある阿美寮がまるで霊界のようだ。直子と一緒にいるワタナベ君はどんどん死の世界に取り込まれていくようだった。

しかし直子はワタナベ君の心がいつか自分から離れてしまう事を知っていた。だから永遠に17歳であるキズキと一緒にいる事を選んで自殺したのだと思う。

阿美寮から帰ったワタナベ君はアルバイト先の新宿に行く。山の奥の閉ざされた阿美寮とは真逆の混沌とした街にいるうちに頭の中が混乱してしまう。しかし活発で元気な緑に会っているうちにしだいに自分を取り戻していった。

私は脳梗塞で父が倒れてから都会のど真ん中と田舎の田んぼの中にある病院とを月に一二回往復していた。そしてそれはしばらく続いた。あまりの環境の違いにどちらが現実なのか、もしかしたらどちらかが夢ではないかという錯覚に襲われた。父はもう意識がなかった。山のトンネルをくぐる新幹線の中で私は泥のように眠った。

小説「魔の山」でもスイスのアルプスにあるサナトリウムと下界、「ホークナーの熊」にでてくる神聖な山と都会の雑踏は時間の流れが違っていて不思議な感覚になる。

物語の中でワタナベ君は死の世界と現実の世界をいったりきたりしている。

最後ワタナベ君は都会の時間の流れの中でレイコと関係をもったことでワタナベ君の時間軸が歪んで、自分はどこの時間と空間にいるのかわからなくなったのではないかと思った。

(おわり)

『裸体の深淵』

ワタナベ君が京都の療養所に直子に会いに行った夜、直子はワタナベ君のそばで月明かりの中ガウンを脱いだ。それは、まるで虫が脱皮するような光景だった。

ワタナベ君は、その美しさを息をのんで眺めていた。手を触れることができない美しさだった。

月に照らされた直子の裸体は、完成された女性の肉体であり、かつみずみずしく、空からこぼれおちる星のようだった。

ワタナベ君には、1年前の彼女の体が思い出された。固くこわばっていて、薄いようで、頼りないようでもどこか鋭さと強さを持つそのアンバランスさ。不完全なもの同士が結合する悦びが彼の感覚に焼き付いていた。目の前の完全な肉体は、近づけない神聖なものであり、親密なものではなかった。ワタナベ君には、以前の不完全な彼女を追い求める気持ちがどこかにあったのではないか。

直子は、なぜワタナベ君に自分の裸体を晒したのだろうか？療養所という外界から閉ざされた殻の中で完成された美しさ。心は完成形ではないけれど、美しい外見をまとった、今ある姿をそのままに。

直子にとって唯一の現実世界のつながりであるワタナベ君に、見て欲しかったのか。あるいはもっと深い思惑があったのか。

ガウンを脱ぎ捨てた直子の髪には、蝶の形をしたヘアピンがついていたが、直子は蝶にはならなかった。心の中で、この世とあの世の激しいせめぎ合いをした直子だったけれど。

ワタナベ君はこの先、おそらくどんなリアルな女性の裸体にも魅力を感じない。直子の完成された裸体と不完全な肉体のあいだの、その曖昧で混沌とした不安定さは、いつまでもはかなげに、けれど鮮明に、ワタナベ君の記憶に残り続けるだろう。

それは罪な事だ。直子の置き土産は大胆で、残酷だ。

ガウンを脱ぎ捨てた直子の髪には、蝶の形をしたヘアピンがついていたが、直子は蝶にはならなかった。心の中で、この世とあの世の激しいせめぎ合いをした直子だったけれど。

切ない。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 私を覚えていて 』

「Automatic」(宇多田ヒカル)の歌手は、恋は自動的だと歌う。確かにそうだろう。

しかし、「愛すること」は技術であるとエーリッヒ・フロムは言う。愛することの前提条件は自立していることだが、キズキと直子はお互いが必要で、相手なしでは生きられない依存状態にいた。キズキ亡き後、二人の balanサーであったワタナベは、今度は自らが直子と依存状態になってしまう。元々 balanサーが必要な関係は、最初から歪んでいるのだろう。

それは、ワタナベが意図せず balanサーになった永沢とハツミにも言えることだ。

歪んだ人間関係の中で、キズキ亡き後に心を病んだのは直子だけではなく、ワタナベもそうだったのではないかと感じた。ただ、症状の出方が違っただけで、直子共々ワタナベも野井戸に落ちたのだ。だから、この先何年、ワタナベが直子に寄り添っていたとしても、何も変わらなかったかもしれない。事実、ワタナベを野井戸から引っ張り出してくれるミドリのような存在に、直子と一緒に落ちたワタナベは最後までなれなかった。

この物語は、ワタナベの独白なのでワタナベ自身の症状はわかりにくい。ただ、同じく野井戸の住人であるレイコに深く取り憑かれてしまうところで、私は確信する。

ミドリとの関係を告白した手紙をレイコに送った後で、直子が自殺したのも、直子自身がもうワタナベの傍にいらなくてもいいと感じたからではないか。直子がワタナベを必要としていたのではなく、ワタナベが直子を必要としていたのだ。きっと、直子はワタナベが今後生きていく指針ができて、症状がよくなるまで、現世にとどまっていたのかもしれない。すでに、キズキのもとへ行くことは決めていたのだろう。

「私のことをいつまでも忘れないで。私が存在していたことを覚えていて。」は直子自身が死んでも、ワタナベが治るまで記憶の中で傍にいてあげるからということなら切ない。でも、三十七歳のワタナベは「ノルウェイの森」が流れるボーイング747の機内で、はっきり理解したのだ。直子はキズキだけを最後まで愛しており、キズキを亡くして自分と同じく傷ついているワタナベへの優しさだった。それが、ワタナベが直子との愛だと思っていた時間の正体かもしれない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「おいキズキ、ここはひどい世界だよ」

いままで、レイコが、嘘つきで、レズビアン中学生は彼女が自分で信じている創作話だというだという仮説で読んでいたが、今回、読み直して思ったのは、直子がレイコにとり憑いているのではないか？ ということだ。もしかしたらキズキと直子の姉は何か関係があり、二人が肉体関係を持てなくなったのは、直子の姉に原因があるのではないか？ そんなことも感じた。当人同士で完結した異常な三角関係があつて、直子だけが生き残ったのではないか？ そして、彼女は、今度はレイコとワタナベくんの三角関係に入っていく。

『源氏物語』で六条の御息所が、源氏と夕顔の枕元に立ったように、阿美寮に遊びに行ったワタナベくんの枕元に立ったのは、レイコに取り憑いた直子の生き霊ではないか？ レイコと直子は、お互い深い共依存に入っており、お互いを食い尽くしている。ラストにレイコが死んだ直子の服を着て現れたのは、やはり、ありや、直子の怨霊だったのかもしれない。『源氏物語』で葵の上に取り憑いたのは、六条の御息所と、その親父の大臣だった。最後のレイコも、あらゆる物の怪をひきずって現れたような気がする。直子やキズキ、直子の姉、みんなの物の怪がびっしりレイコの体に取り憑いていたとしたら、ワタナベくんも…。冷や汗、冷や汗。

大学解体を叫びストを指導した学生連中が、スト破りして平然としている。良心の呵責を感じずに、やがて大企業に、就職していく。「おいキズキ、ここはひどい世界だよ」

『君たちはどう生きるか』のコペルくんが、北見くんと約束を守れずに知恵熱を出すような煩悶などない。だとしたら、やっぱりひどい世界だ。

緑は、生の跳躍と言うべきパワーを秘めている。彼女は、春の熊のように生きている。彼女の自然は、物の怪を弾き飛ばす。

「私が怖いのはね、そういうタイプの死なのよ。ゆっくりゆっくりと死の影が生命の領域を蝕して、気づいたらうす暗くて何も見えなくなって、まわりの人も私のことを生者よりは死者に近いと考えているような、そういう状態なのよ」 第四章

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

「ちょっと春樹ファンになりました。」

一番作者の能力に驚いたのは、傷を抱えた人の心に響くセリフや、現代で生き抜くための格言のような文が幾つも書かれていた事です。

「4章 孤独が好きな人間なんていない。失望するのが嫌なだけだ。」

「4章 自分がやりたいことをやるのではなく、やるべきことをやるのが紳士だ。」

「9章 君が残っている」

「10章 何もかも深刻に考えないようにしなさい。私たちは不完全な世界に住んでいる不完全な人間なのです。」

「10章 放っておいても物事は流れるべき方向に流れるし、どれだけベストを尽くしても人は傷つくときは傷つくのです。人生とはそういうものです。あなたもそういう人生のやり方を学んでいい頃です。あなたは時々人生を自分のやり方に引っ張りこもうとしすぎます。もう少し心を開いて人生の流れに身を委ねなさい。もっと幸せになりなさい。幸せになる努力をなさい。幸せになれると思ったらその機会を捕まえて幸せになりなさい。それを逃すと一生悔やみますよ。」

「11章 死は生の対極にあるのではなく、我々の生の中に潜んでいるのだ(死を自覚することで生きていけるという意味か?)」

「11章 どの様な心理も真理も、どの様な誠実さも、どの様な強さも、どの様な優しさも、その悲しみを癒すことはできないのだ。」

「7章 君のことを考えればこそ、さあネジを巻いてきちんと生きていかなくちやと僕は思うのです。」

「8章 自分の力を100%発揮して、やれるところまでやる。そうやって生きていく。不公平な社会は逆に考えれば能力を発揮できる社会でもある。おれはそのために凄く努力している。世間の人がしているのは努力でなくて労働だ。努力と言うのは主体的に目的的になされるものだ。(自分の意志、つまり自分はこうすべきだという願いのために行動することを努力と言う。という意味か?)」などです。

この他にも、天気の変化で心情の変化を表したり、音楽で心情を暗示したり、名前で性格を暗示したり、多くの手段を使って読者を惹きつけ楽しませようとしていて、才能の高さを感じました。でも今後の作品を私は読むことはないと思います。どうしても超現象的な内容や性行為の描写の多さが嫌なので、残念ですがちょっと春樹ファンのままで終わりそうです。

(おわり)